



# 江南小だより

八戸市立江南小学校 学校だより  
令和3年2月25日発行  
通算 第517号

教育目標 強い子になろう



## さんねんでもいいんだ

校長 花生 典幸

表題に挙げた「さんねんでもいいんだ…」は、だれの言葉かお分かりでしょうか？（保護者のみなさまはハテナかもしれませんが、子どもたちの多くはピンとくるでしょう）。

答えは、『さんねんないきもの事典』等の著書で有名な、動物学者の「今泉忠明」さんです。今泉さんは、あるインタビューの中で、なぜ“さんねん”という、ある意味マイナスなネーミングをしたのかと問われ、こんなふうに答えています。

**「もうちょっとがんばりたいんだけど、できないと言って悩んだり、困っていたりする子どもたちへの励まし、そういう気持ちが実は込められているんです。」**

**速くなくてもいい、強くなくてもいい、隠れていてもいい。うまくいかないことがあっても、それでも胸を張って歩いていこうよ、という励ましです。これはふだん子どもたちが無意識に感じていることかもしれませんし、トップをとらなくてもいい、負けてもいい、そう楽にさせたところが子どもたちに受けたのではないのでしょうか！**

上のお話を読むと、今泉さんは、「さんねん」という言葉を逆説的に使っているのわかりますね。それは子どもたちにある種の「安心感」を与えるものとして機能している。子どもたちが、毎日のようにこのシリーズを図書室で奪い合うようにして読んでいる姿を見ると、まさしくそのとおりでなと思ったりしました。

そこからわたしは、別な見方もしてみました。

『さんねんないきもの事典』で紹介されている生き物たちの「さんねんな特性」は、実はそれぞれの生き物たちにとって、**安全に生きていく上で不可欠な生存戦略**でもあるということです。

**「ダンゴムシの大好物はコンクリート**

→ **体の殻がカルシウムでできているので、コンクリートを食べてより頑丈にしている」**

**「アマガエルは蜂を食べると、胃袋を吐き出す**

→ **蜂は針や毒をもっているので、飲み込んでしまうと、おなかを傷つけてしまう。それを避けるため、胃袋ごと中身を吐き出し、さらに驚くことには、出したその胃袋を前足でゴシゴシ洗って、再び戻してピンピンしている」**

……残念どころか、むしろ「すごい！ 素晴らしい！」と叫びたくなる、そんな感動すら覚えます。“さんねん”は、一方では“特別なすばらしい長所（能力・個性）”でもあるのです。

いろいろな個性や能力（あるいは弱点や短所）をもった子どもたちがいます。それを一面だけ見て評価するのではなく、**多面的・複合的（将来まで視野に入れながら）**に見ていくことの大切さを、今泉先生から教えられる気がいたします。

